

## フランス留学報告書

藤本みのり  
博士後期課程3年

コロナ禍の影響で渡航が1年遅れ、2021年9月から2022年3月までの半年間、パリ郊外に位置するオルセーのIJCLabに滞在しました。

私はATLAS実験という高エネルギー物理の国際共同実験に参加して研究を行っています。加速器を用いて高エネルギーで粒子を衝突させ、出てきた粒子の分布を解析することによって新たな物理法則の発見を目指すという実験です。IJCLabでは主に解析の最終段階における統計処理を行いました。博士論文執筆のために必要な主な統計処理を終わらせてくることができました。研究所には同じ解析を行っている学生と研究員が所属しており、私も解析グループの一員として彼らと共に研究を進めました。現地で直接議論しながら研究を進めることができ、大変学ぶところの多い滞在となりました。特に感銘を受けたのは彼らの細部を追求する姿勢です。物理解析の細かい手法については、実際に経験のある人に直接話を聞いて初めてわかるということが非常に多かったと思います。渡航して研究グループの一員として学べたことは、博士論文を完成させる上で必要不可欠な経験となりました。

研究所にはわたしの他にも同様な解析テーマで研究を進めていた学生がもう2人いました。彼らを見ていて、フランスのphD課程では、人数が限られているということも理由としてあるのかと思いますが、研究において新しいものを生み出す一方でひとりの学生に対して非常にしっかりと指導をするという印象を受けました。日本との制度や文化の違いが感じられる点であり、興味深く思った点のひとつです。その他に、実際研究所を訪れてみて、また休日に美術館などを訪れて文化に触れてみて、科学が勤労や軍事と並んで、非常に大きな力だと捉えられているというように感じました。科学が未来を切り開くために非常に重要だというのは、国に依らず普遍的なことだと思います。

日常生活においては、周りには学生も研究者も様々な国籍の人がいましたので、普段は英語でコミュニケーションをとっていました。渡航前もミーティングで英語を話す必要があったので喋ってはいましたが、やはり喋る頻度が格段に増えたので、6ヶ月でかなり英語が喋れるようになったと感じています。町での買い物や事務手続きにおいてはフランス語を話す必要があったので、渡仏当初よりはかなりフランス語に慣れました。フランス語が少しでも喋れるとかなり親切に接してもらえるように思いました。全体的に人々がかなり親切で、言葉もだんだんわかってくるととても快適に毎日をすごすことができました。また、給費留学生であることでかなり煩雑な手続きが緩和されて非常にありがたかったです。

コロナ禍という難しい時期でしたが、関係者のみなさまのご尽力のもとに無事渡航ができ、大变得るものが多い留学となりました。これからもこの留学で得た人との繋がりや経験を生かし、日仏の研究の架け橋の一助になればと思います。この貴重な機会を与えてくださ

った関係者のみなさまに、心より感謝申し上げます。